

8.26 金 第406回 定期演奏会

西田紘子(九州大学大学院 芸術工学研究院 准教授)

ニーノ・ロータ(1911-1979)

組曲「道」

イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニ(1920～1993)とロータのコラボレーションは15作を超える。その代表作といえるのが1954年の映画『道』で、第29回アカデミー賞「外国映画賞」をはじめとして国内外で高い評価を得ている。映画公開からおよそ10年後、ミラノ・スカラ座から映画のバレエ化を委嘱され、12場からなるバレエも新たに作られた。

バレエには、『白い酋長』『魂のジュリエッタ』など、ロータが手がけた他の映画音楽もとり入れられた。本日は、同年に編まれた組曲版をお聴きいただく。

おもな登場人物は旅芸人ザンパノとその助手ジェルソミーナ、そして綱渡り芸人マットである。

第1曲: 田舎の結婚式「ザンパノが来たよ」

旅芸人ザンパノは新しい助手を探している。そこで、賢くはないが従順なジェルソミーナが、家計を支えるべく母親に売られることに。ザンパノから芸を教えこまれ、二人で巡業する。

行進曲風の華やいた音楽に、弦と木管の哀愁あるメロディが続く。

第2曲: 3人の楽師と、綱渡りする「マット」

ジェルソミーナは、身勝手なザンパノに嫌気がさして故郷へ帰ろうとする。その途中で楽師たち(フルート、クラリネット、チューバ)、そして綱渡り芸を披露するマットに出会って楽しむが、結局ザンパノに連れ戻される。

3+3+2のルンバのリズムを刻む打楽器と、トランペットのはずむメロディにご注目。

第3曲: サークス(ザンパノの曲 手品師「マット」のヴァイオリン)

ジェルソミーナの小太鼓を合図に、ザンパノは手品を始める。犬

猿の仲のマットが茶々を入れてくる。

マットが弾くヴァイオリンのメロディに強く惹かれるジェルソミーナ。自分でもトランペットで吹くようになり、物語の中でジェルソミーナを象徴するメロディとなっていく。

第4曲: ザンパノの怒り

マットの態度に堪忍袋の緒が切れたザンパノは、ナイフをもって追いかける。警察沙汰になり、サーカス団を追いつけられる。

出だしのリズムは、29歳年上のイーゴリ・ストラヴィンスキーの「春の祭典」を思い起こさせる。実際、ロータとストラヴィンスキーには交流があった。

第5曲: ザンパノが「マット」を殺す 悲嘆にくれるジェルソミーナ

路上で遭遇したマットをザンパノは殴り殺してしまう(ただし映画ではこの場面で音楽は流れない)。

第6曲: 雪の中のラスト・ショー 「さようなら、ジェルソミーナ」

雪の土地。ショックで魂が抜けたように眠るジェルソミーナを、ザンパノは置き去りにする。

ハーブやチェレスタ、ピアノなどによる幻想的な序奏、ヴァイオリン・ソロ、そして静かな間奏曲が続く。

第7曲: ザンパノの孤独と涙

時が過ぎ、旅を続けるザンパノ。懐かしいメロディを耳にして、ジェルソミーナが死んだことを知る。夜、波打ち際でひとり涙する。

トランペット、そして最後にヴァイオリン・ソロがこのジェルソミーナのメロディを奏で、消え入るように終わる。

作曲(バレエとその組曲)/1966年 初演(バレエ)/1966年9月2日ミラノ・スカラ座 編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、合わせシンバル、吊るしシンバル、小太鼓、タンバリン、ウッドブロック、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、弦5部  
使用楽譜/リコルディ

## ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)

### 歌劇「外套」(演奏会形式)

舞台はパリの端っこ。セーヌ河岸に浮かぶミケーレの荷船。

50歳のミケーレには25歳の妻ジョルジェッタがいる。ジョルジェッタは5歳年下の労働者ルイージと恋仲だ。

ミケーレは、つれない態度の妻にいらだちを覚える。夜、妻の逢引き相手を待ち伏せ、とびかかる。絞め殺して、死体を外套の中に隠すのだった。

ほどなくしてジョルジェッタが現れ、不安だからミケーレの外套にくるんでほしいと近づく——「だってあなたはよく言ったものよ、“どんな人にも外套が必要だ。時に大いなる喜びを、時に深い悲しみをそこに隠すのさ”って」。すると、夫は外套を開いてみせた。足元に転がる愛人の死体。ジョルジェッタは悲鳴をあげる。

以上が本作のあらすじである。1時間もかからない1幕もの歌劇で、「修道女アンジェリカ」「ジャンニ・スキッキ」とともに同時初演された。3つの歌劇は、時代設定や筋書きは全く異なるが、一晩で連続上演することを前提として構想された。そのため「三部作」と呼ばれている。

「外套」の原作は、フランスの劇作家ディディエ・ゴルドの同名戯曲。イタリア人作曲家プッチーニは、1912年にパリでこの劇を観て気に入り、すぐにオペラ化に着手した。

三部作となったのはなぜか。プッチーニは、血まみれシーンで終わるこの劇に対して、なにかコントラストとなるものが必要だと考えていた。そこで気鋭の脚本家ジョヴァンニ・フォルツァーノが、あらたに別種の悲劇と喜劇を書いて三部作にしましょうと提案してきたのだ。こうしてフォルツァーノが2つの新作を書き下ろし、本作についてはジュゼッペ・アダミがもとの戯曲をシンプルな形に書き改めて三部作が成立した。

晩年期に発表された本作は、内容や形式から、マスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」やレオンカヴァッロ「道化師」といった19世紀末ヴェリズモ・オペラの系譜に位置づけられる。ヴェリズモとは真実主義・現実主義という意味で、庶民の生活やその心理・感情を生々しく描く傾向をいう。警笛、売り子の呼び声、手回しオルガンなど河沿いのサウンドスケープ(音風景)も豊かである。

以下、便宜上の見出しに沿って全体をたどろう。

#### セーヌ河

1900年代初頭、9月。日暮れ。序奏は、河の悠久の流れを描写するとともに、港湾労働の疲れを暗示する。その後も、全体の節目となる部分に現れるモチーフだ。

労働者の声や、遠くから警笛が聞こえてくる。冷めきった夫婦とルイージ、そしてティンカやタルパといった労働者が登場。

#### 手回しオルガンと、流しの唄

フルート2本が調子はずれのワルツを奏で、流しの歌手が「ラ・ボエーム」からミミの物語を朗々と歌う。

#### 夢

タルパの妻フルーゴラらが出てきて、夢や諦めを語る。ジョルジェッタは、パリ郊外にある故郷に帰れる日を夢見ている。同郷出身のルイージもこれに加わって二重唱。

#### 秘密の約束と、ミケーレの焦燥

通りすがりの恋人たちの歌声が聞こえる。

二人きりになったジョルジェッタとルイージ。仲がばれる不安と、抑えきれぬ恋の情熱が、オスティナート(音型の反復)や半音階、転調などにより高まっていく。夜、マッチの炎を合図に会おうと約束する。

いっぽう、妻の愛をもはや得ることのできないミケーレは疑心暗鬼だ。鐘の音、恋人たちの歌、そして近くの兵舎からラッパが響く。老いたミケーレは「安らぎは死の中にある!」と静まった河に向かって叫ぶ(なお、この独白の部分は初演後に少し書き換えられた)。

## 外套に隠された犯罪

ミケーレがパイプに火をつけると、逢引きの合図と勘違いしたルイーダが忍びつつやってくる。音型をくり返すごとに切迫感を強め、とうとうミケーレは妻の不倫相手の首根っこをつかむ。ルイーダは「彼女を愛している」とくり返しながらか、ティンパニ連打とともに意識を失う。静寂。おそろおそろ近づく妻に、ミケーレはむき出しの感情と力をぶつけるのだった。

作曲／1913年、1915～1916年 初演／1918年12月14日ニューヨーク、ロベルト・モランゾーニの指揮 編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チンバasso、ティンパニ、大太鼓、吊るしシンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、鐘、ハープ、チェレスタ、弦5部  
使用楽譜／リコルディ

※編成は演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。



**ZENRIN** Maps to the Future

株式会社 ゼンリン 福岡県北九州市戸畑区中原新町3番1号

## Program

コンサート・プログラム

9/4

## 九州交響楽団 長崎公演 2022

Kyushu Symphony Orchestra Concert in Nagasaki 2022

9月4日(日)開演：午後4時

4th Sep. (Sun.), 2022 16:00

長崎ブリックホール 大ホール

Nagasaki Brick Hall

指揮 角田鋼亮  
Conductor : Kosuke Tsunoda

ヴァイオリン 中村太地  
Violin : Daichi Nakamura

コンサートマスター 扇谷泰朋  
Concertmaster : Yasutomo Ogitani

アラム・ハチャトゥリアン  
Aram Khachaturian

組曲「仮面舞踏会」より ワルツ  
Waltz from "Masquerade" Suite

アラム・ハチャトゥリアン  
Aram Khachaturian

ヴァイオリン協奏曲 二短調  
Violin Concerto in D Minor  
I. Allegro con fermezza  
II. Andante sostenute  
III. Allegro vivace

休憩 intermission

アントニン・ドヴォルザーク  
Antonín Dvořák

交響曲 第8番 ト短調 作品88  
Symphony No.8 in G Major Op.88  
I. Allegro con brio  
II. Adagio  
III. Allegretto grazioso  
IV. Allegro ma non troppo

※プログラムノートはP.28～P.31をご覧ください。

主催／(公財)九州交響楽団  
共催／NBC長崎放送  
協賛／長崎自動車(株)  
助成／文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会  
後援／長崎県・長崎市・長崎県音楽連盟・長崎県吹奏楽連盟・長崎新聞社・西日本新聞社  
朝日新聞社・毎日新聞社・読売新聞西部本社・NHK長崎放送局・エフエム長崎  
(株)長崎ケーブルメディア・九響後援会

九州文化  
KYUSHU BUNKA